



vol.39

この装備、本当に必要？ その②「フォグランプ」

このコーナーではクルマに関する
為になる雑学をご紹介します。
意外と知らないことがあるかも!?



最近のクルマには様々な装備が装着されています。便利な装備もあれば、「本当にこれ必要なの?」と思えるような装備もあります。人によっては、せっかく付いている装備でも、クルマを購入してから一度も使ったことがない装備もあるかと思います。便利な装備が増えるのはうれしいことですが、その逆に装備が増えるとクルマの価格は高騰します。使わない装備の場合、むしろ無い方が軽量化でき動力性能のアップ・燃費の向上につながるのです。

そこで前回から「くるまのざつがく」では、数回にわたり、クルマの装備・機能について見つめ直していきたいと思います。

1



フォグランプってなんで付いているの?

フォグランプとは道路運送車両法では「前部雾灯」と呼ばれる、自動車のライトの一種です。fog(フォグ)は英語で「霧」。その名のとおり、もともとは霧が発生した際につけることを目的につくられたものであり、濃霧が発生し運転が困難に感じる際に使う補助灯としての役割を持ちます。フォグランプのメリットは、霧の中での安全な視界確保ができるとともに、他の車からの被視認性を向上させることが可能です。



2



フォグランプにはどういう効果があるの?

霧の発生、なかでも濃霧の状況下では視界の確保が難しくなってしまいます。濃霧のなかで、通常の前照灯(ハイビーム)で遠くまで見ようとすると、霧の水分に光が乱反射してしまい、かえって見えづらくなってしまいます。そこで、フォグランプの出番です。

フォグランプは、上下の照らす範囲を通常のライトよりも狭く、左右に広く照らし出すような構造になっており、光の乱反射を防いで視界を確保できるのです。

さらに、左右の視界が取れる分、周りの自動車からも自分の自動車が視認しやすくなるという効果をもっています。また、霧の中でなくとも街灯が少ない道路や、細い道で視界を確保したりする場合にもフォグランプは有効です。より広い範囲を照らすことができるため、夜道で歩行者の確認をしやすくなることも覚えておきましょう。

3



フォグランプの色について

フォグランプは、現在は白いものがほとんどですが、昔には黄色のものも良く見かけられました。これらの色による違いは、視認性にあるといわれ、一般的には波長の長い光は霧をはじめとした水の反射に強い色とされます。そのため、本来は波長の長い「赤色」のランプが霧の中でも遠くまで見通せる光だと考えられましたが、ブレーキランプやパトランプと混同してしまうために、次に波長の長い「黄色」が取り入れるようになったようです。ところが、現在はランプの性能が向上したことや、色が付いたランプだと特定の色が認識しづらくなってしまったり、距離感がつかみづらくなってしまったりする点から、白色のランプの割合が増えたようです。



4



機能性を保ち、外観のカッコ良さが増す現在のフォグランプ

フォグランプが標準で装備されているクルマも多く、オートライトのクルマも多いため、霧のない市街地でも当たり前のように点灯して走っているクルマも多いかと思います。今のフォグランプはLEDのものがほとんどで、「視認性」というよりは、より明るく照らし、夜でも走りやすいようにといった感覚で使用している方も多いかと思います。また外観の前面フォルムのドレスアップの一部といった感覚の方も少なくないかと思います。